

The Woodlanders; 明暗・欲望・視線

谷 山 智 彦

(1) はじめに—*The Woodlanders* の明暗の描写

The Woodlanders は1887年に出版された Thomas Hardy の小説作品の一つである。本稿ではこの作品を中心に取り上げる。彼の作品は良く知られた *Tess of The D'Urbervilles* をはじめとして、その多くが彼の故郷の Dorset をモデルとする Wessex と呼ばれる英国南部の田園を舞台とする恋愛悲劇であり、それが印象的な自然の情景と共に独特の雰囲気をもって描かれる。これは彼の作品の際立った特色であり、この作品も例外ではなく、そのような要素を兼ね備えている。そして、そのような彼の作品の中で最も注目すべきはこのような作品世界が緻密な描写によって描かれているということである。彼の作品ではこの男女の恋愛模様が人物の緻密な風貌と共に描かれ、同時にそれに並行して、舞台となる田園の荒野、森林地、及びそこに生きる動物、植物もまた生き生きと細密に描かれる。人物の関係やそれぞれ個々の感情に大きな動きが生じる時には、この人物の精密な描写に加えてこのような自然の風景が彼らのそばに見え隠れする。このような精密な人物の姿や風景の中には人物の語られざる深層心理や感情などがしばしば比喩的な形で表象される。このような緻密な自然描写と人物の様子は相互に絡み合い、それによって人間の心理的な動きが効果的に表されるのである。

風景、人物の風貌といった描写は数多く作品に登場するが、本稿ではそのような描写の中でも作中の自然や人物の風貌に差し込む光と闇の描写に着目して作品を考察する。Hardy の作品では、しばしば人物の感情に連動して、

光や闇、影が場面に現れ、人物の感情や心理を効果的に表す。このような作品における光と闇の効果は彼の作品を読み解く上で重要な要素と考えられている。¹ここではこの光と闇の描写の意義に着目し、作品を読み解いていく。そして彼の作品の中でもこのような明暗の描写が頻出する作品のひとつである *The Woodlanders* を中心に考察する。

この作品でこのような明暗の描写が目立って使用される背景には彼の様々な作家としての意図があったようである。この *The Woodlanders* は年代的には彼の小説家としての円熟期の作品である。この時期に Hardy は自分の故郷である Dorsetshire の環境や伝統そして人々の暮らしをさらに考察、分析し、これを自分の作品にさらに強く反映させようと模索していたようである。このことを Frank R. Giordano Jr. は “Hardy had realized the practical benefits of exploiting his deep understanding of his native region, its people and their traditions, for his artistic productions”² と述べ、彼の故郷の伝統や文化、環境が彼の創作において、非常に重要な位置を占めていることを彼自身、自覚していたことを指摘する。このように地域の社会や伝統に目を向けた彼が最も注目したと思われるのが、そのような社会と伝統の中での人と人との相互の関係性である。Hardy は1886年、作品の出版の前年の日記においてそのような人間の相互関係に関する関心を “The human race to be shown as one great network of tissue, which quivers in every part when one point is shaken, like a spider’s web if touched. Abstract realism to be in the form of Spirits, Spectral figure [...]”³ と述べ、人間は蜘蛛の巣のように複雑に絡み合い、相互に強く影響し合っていることを指摘し、このような人間の相互関係に只ならぬ関心を示している。それに加えて、その中で働く人間を突き動かす何か根源的なもの、情念や内面的な感情の存在を意識し、強い関心を向けていたようであり、特にこのような人の相互関係の中でも彼は特に男女の関係性とそれに伴う内面の動向に強い関心を向けていたようである。そのような関係、交遊を描くことによって、彼はこの人間の根源的な問題を描こうとしていたのである。現にそれを示すように、この作品では舞台となる地域の特色を “[villager’s]

intermarriage were of Hapsburgian frequency among the inhabitant, and there were hardly two houses in Little Hintock unrelated by some matrimonial tie or other” (26)⁴と表し、この地域での婚姻や恋愛の関係の重要性を強調する。さらに彼は上記の日記と同年の日記において、“My art is to intensify the expression of things [...]. so that the heart and inner meaning is made vividly visible.” (183)と記しており、彼はそのようなところに現れる内なる感情や情念等を鮮明かつ視覚的に作品に表すことに意欲を持っていたのである。彼が光や闇の描写をこの作品に多用した背景にはこのような彼の作家としての意図があったのである。加えて、彼の生きた時代は故郷の田園地帯にも急速に発展を迎える都市の文化が流入し、旧来のコミュニティーに大きな変化が齎された時代でもあり、この地域の人々にも少なからず変化が現れ始めたのである。彼はこのような変化する時代の中で変化する人々相互の関係性にも強く注目し描いている。

以上のような彼の芸術的意図と時代の流れを背景としてこの作品は書かれたのである。Hardyはこの作品で光と影の描写を人物同士の関係性やその心理を表す描写として上手く機能させる。例えば Michael Irwin は光の描写に着目しながら、“His way of describing light derives from a habit of seeing [...].”⁵と述べており、彼の光の描写は人物のものを見るという行動と深く関連した描写であるとしている。つまり、光を通して、人物のそれぞれの他者に対する視線及びそれに付随する内面の動き、欲望や願望などが描写されるのである。このような視線は人物の相互関係やその中の心理に関わる重要な要素であり、Irwin が指摘するようにこの作品では、人物同士の視線のやり取りが描かれる際に、頻繁にそのような光の描写が現れる。本稿ではこの人物同士、特に男女間で取り交わされる視線と光にさらに闇、影との関係も付け加え、視点を広げて、これを中心にして作品を読み解いて行く。そして、この作品では視線を交わす人物が数多登場するが、その中でも物語で重要な位置を占める Marty South と Grace Melbury の二人の女性とその周囲の男性の目線とその周辺の明暗の描写を中心に据えて考察する。

(2) 異邦人 **Percomb** の侵入—**Marty** と明暗描写

この作品はある日の夕暮れ時に舞台となる Hintock という森林地に一人の男が訪ねて来るところから始まる。森林地に行く彼の描写がまずはひたすら描かれ、この地の薄暗さや物悲しさといった独特の雰囲気を読者に示される。そしてその後、暗黒の風景の中から徐々にこの男の姿や詳細が明らかにされていく。読者は徐々にこの人物の内面に迫っていくのである。

この男は都市部から商用でこの地にやってきた理髪師で鬘職人の Percomb という男であることが示される。彼の目的地の Hintock に到着すると、そこから彼の内面に迫った描写が光と闇の描写と共に開示されて行く。森林地に行く彼の眼前に印象的な光が闇の中に登場する。

Half a dozen dwellings were passed without result. The next, which stood opposite a tall tree, was in an exceptional state of radiance, the flickering brightness from the inside shining up the chimney and making a luminous mist of the emerging smoke. The interior, as seen through the window, caused him to draw up with terminative air and watch. The house was rather large for a cottage, and the door, which opened immediately into the living-room, stood ajar, so that a riband of light fell through the opening into the dark atmosphere without. Every now and then a moth, decrepit from the late season, would flit for a moment across the outcoming rays and disappear again into the night. (6)

以上は Percomb の眼前に現れた森林地の家の様子である。夜の帳に周囲が包まれ、殆ど家屋の灯など見えない中で唯一つだけ灯りを発する家屋が闇の中に現れる。光はその家屋から窓を通じて、煙と共に闇の中に放たれ、非常に印象的な雰囲気を醸し出す。Percomb はさながら光に引き寄せられる蛾のように引き寄せられていく。

この家こそ彼が目的とした場所である。この家屋の中には Marty South という女性が光に照らされる中、夜半まで内職に励んでおり、“In the room from which this cheerful blaze proceeded he beheld a girl seated on a willow chair, and busily working by the light of the fire, which was ample and wood.” (7) と描写される。そして彼女の姿は部屋の灯の中で次のようにさらに描かれる。

Her face had the usual fulness of expression which is developed by a life of solitude. Where the eyes of a multitude continuously beat like waves upon a countenance they seem to wear away its individuality; but in the still water of privacy tentacle of feeling and sentiment unfold in visible luxuriance, to be interpreted as readily as a printed book by an intruder. (8)

Marty South の顔をここで窓越しに Percomb は認識する。その姿は彼女のこの森林地での孤独で質素な生活とそれに伴う感情を強く反映したもののよう描かれる。彼女の風貌は、この地域での経験やその中で培った感情がそこから読み取れるもののように表されるのである。それは“in the still water of privacy tentacle of feeling and sentiment unfold in visible luxuriance [...]”と語られ、彼女の内面の豊かさや動きが視覚的に溢れるように彼の眼前に現れるのである。それは人の顔でありながら、印刷された難解で複雑な書物のように彼の目には映る。このような様子は Hardy の他の作品でも見られる描写であり、この書物のようなイメージを持つ風貌は *The Return of the Native* の Clym のそれを思わせる。例えば、Clym の登場の際に彼の姿は“Hence, people who began by beholding him ended by perusing him. His countenance was overlaid with legible meanings.”⁶と描写される。彼の姿や顔はやはり“legible”“peruse”といった読書や文書の分析と関わる語によって示されるのである。この点は上記の Marty の“printed book”という描写と通じるものであると思われる。

このような彼女の風貌を彼は執拗に観察し、さながら書物の文面から意味を理解しようとするかのようにその風貌から執拗に何かを読み取ろうとするのである。先の引用にある本のような彼女の相貌はまさに彼のこのような観察とそれに付随する視線や欲望を強く示唆した表現とって良いだろう。(そして同時に家を満たす灯の光はこの書物を読み取ろうとするかのような彼の Marty へと向ける視線を強調する。)尚、このような風貌や情景から何かを読み取ろうとする人物の視線や行動はこの Percomb をはじめとして、この作品の人物、特に男性に頻出する。彼らはそれぞれ異なった意図を持って人物を目にして、解釈して捉えるのである。このような行動は人物相互の関係に強い影響を与え、様々な感情や行動を招く。ここでの Percomb の彼女に対する行動もまたこのような物語の核となる行動の一つに数えられるとって良いであろう。彼のこのような行動はさらに詳細に描かれる。続いて、彼の観察の最も中心となる対象は彼女の体の全てではなく、その一部、即ち髪であることが示される。

Thus she had but little pretension to beauty, save in one prominent particular—her hair. Its abundance made it almost unmanageable; its colour was, roughly speaking, and seen here by firelight, brown; but careful notice, or an observation by day, would have revealed that its true shade was a rare and beautiful approximation to chestnut. (8)

彼女の風貌の中で群を抜いた美しさを示す髪は一見すると茶色の髪のように見えるが、注意深く観察するか、もしくは昼間に良く見ると非常に珍しく美しい栗色である。ここで“notice”“observation”といった観察、注意深く見ることを意味する言葉が繰り返されているが、このような言葉によってこの部位がいかに人の視線を引き付けるものであるかが強調されるのである。

このような魅力的な彼女の姿に彼の目は強く注がれる。その様子はこの空間の光と絡み合いさらに強調されて描かれる。

On this one bright gift of Time to the particular victim of his now before us the newcomer's eyes were fixed; meanwhile the fingers of his right hand mechanically played over something sticking up from his waistcoat pocket — the bow of a pair of scissors, whose polish made them feebly responsive to the light from within the house. In her present beholder's mind the scene formed by the girlish spar-maker composed itself into an impression-picture of extreme type, wherein the girl's hair alone, as the focus of observation, was depicted with intensity and distinctness, while her face, shoulders, hands, and figure in general, were a blurred mass of unimportant detail, lost in haze and obscurity. [sic] (8-9)

彼の欲望はこの空間の明暗の描写に強く反映される。彼の目には頭髮のみが重要な部位として光が当たり、その他の部位は関心の対象外のものとして光の当たらない影に隠されてしまう。さらに加えて、彼が持つ鋏に部屋の灯りが反射して強い光を放つ。特にこの鋏に反射して輝く光は彼の Marty の最も魅力的な身体の部分を我が物としようという彼の欲望が強く表されていると言える。このように、この空間の光と影の様子は彼の内に秘めた Marty に対する欲望を強く反映したものとなっている。ここでは見るという行為とその行為に内在する欲望が光と影によって効果的に読者に示されるのである。そして、その様子はここで “an impression-picture of extreme type” と表されるが、ここで一つ注目すべきことは Hardy の表現が印象派の絵画を思わせることである。印象派絵画は良く知られているように、1870年代にフランスで始まった光の瞬間的な印象を色彩によって、絵画を表現しようという芸術形式である。⁷ 彼はここで光の効果をこのような絵画的な方法論によって表そうとしていたのである。現に彼はこのような絵画の近代的な手法に強い関心を寄せており、英国にこのような絵画が持ち込まれた際にも只ならぬ関心を寄せていたようである。Hardy はこれが人間の主観や感覚を視覚的に表す重要な手段として考えていたようであり、この点は多く指摘されるところでも

ある。例えば J.B. Bullen は彼がこのような技法をこの作品に取り入れたことに関して次のように述べる。

The significance of Impressionist technique to Hardy was that not only was it a quintessentially modern style of painting, it was also one which embodied a highly subjective response to visual stimuli. [...] As in Percomb's perception of Marty South's hair, Impressionist technique focused on some elements in the visual matrix to the exclusion of others, but it reflected, above all else, the characteristics, the prejudices, and the disposition of the perceiving mind.⁸

このような印象派絵画の手法は Hardy にとっては最新の近代的手法ということのみならず、人間の主観及び主観の外界に対する反応を十分に表現するに足る画期的な技巧であり、これを導入することによって彼は人物の偏見や願望といった性格を明確に描いているとここで言われている。確かに Hardy は創作に当たって、このような人間の主観や感覚を明確に描く意図があったようであり、それは上記に既に引用した彼の日記等を見れば、明白であると思われる。やはり、彼にとってこのような絵画的な光の効果は非常に有用なものであったのであろう。⁹ この Percomb と Marty の場面はそのような彼の意図と技術も明白に示されているところといえる。

このように Percomb の Marty への視線と欲望はこの場面において、明暗によって効果的に示されている訳だが、これに加えて、Percomb は舞台となる森林地 Hintock にこの地の文化とは質を異にする概念を持ち込み、それによって Marty の内面に少なからず影響を与える。彼による Marty の髪を鬘にしようとする行為はこの作品における悲劇の出発点となっている。彼が彼女の髪を手にした結果、Marty はその美貌を失い、Giles は家を失い、逆に Percomb はそれを Mrs. Charmond に引き渡すことによって金銭を手にする。そしてこの婦人はその鬘によって Fitzpiers 等の男性を誘惑する。こ

のようにこの出来事が引き金となって、一方のものが何かを失う傍らで、もう一方がその犠牲によって何らかの利を得るという生存競争、近代の苛烈な資本主義の競争原理のような状況が齎されるのである。この点を Angelique Richardson も以下のように指摘する。

The novel also suggests that the imposition of a capitalist economy upon a rural community is the cause of struggle and unhappiness. Mrs. Charmond can afford to pay for Marty South's hair, charm Fitzpiers, and render Giles homeless [...].¹⁰

彼女はこのような生存競争のような資本主義的な苛烈な競争とその価値観が田園の中に持ち込まれているということを指摘する。そして、そのような概念を作品中で最初にこの Hintock へと持ち込む人物こそ Percomb である。彼はこのような価値体系に基づき Marty に視線を向ける際に彼女を飽くまでも自分が利を得る為の商品であり、Mrs. Charmond が消費する為の商品として認識する。Richardson はこの点を指摘し、この Percomb と Marty の場面を以下のように分析する。

The opening pages of *The Woodlanders* highlight the alienation that money out of place brings to the community: 'The two sovereigns confronted her from the looking-glass in such a manner as to suggest a pair of jaundiced eyes on the watch for an opportunity.' In this image, consumer culture literally divides Marty from herself, physically distorting her appearance. (169)

Richardson は Percomb によって持ち込まれた上記の価値観は Marty の自分自身の姿、身体の見方を変えてしまうことを指摘する。彼女は Percomb によってその髪を差し出すように求められた後、彼が彼女の髪の代金として置

いて行った二枚の金貨を鏡によって目にする。その二枚の金貨は彼女の目にまるで彼女の髪の強い視線を注ぐ Percomb の目のように映ってしまう。ここでは“jaundiced eyes” (14) という語がそれを示す。これは疑いなく、Percomb の彼女に対する視線を暗示するものであり、これによって彼女は自身の身体が彼の欲望の対象、金銭と交換可能な商品のようにやはり見られていると強く意識するのである。(同時に彼女はそのように見られてしまうことに嫌悪感を抱き始めるのである。) このようにして、彼女の意識は Percomb と彼の視線によって自分の身体に対する意識を大きく変えられてしまうのである。後述するが、この後に彼女はその髪の毛を切り落として自らその美を損なうことになる。このことはやはりこのような彼女の意識と当然、無関係ではない。

この Percomb との会話を起点として、彼女はその身体や姿を欲望の対象として見られることに対する嫌悪感を高め始める。Marty South は Percomb にその美しい髪の毛を鬘として売り渡すように迫られるが、これを頑なに拒否し、それを示す。Percomb は彼の知る上流階級の夫人である Mrs. Charmond の所望する鬘のために彼女に迫るが、彼女は “[...] She wants my curls to get another lover with; though if stories are true she's broke the heart of many a noble gentleman already.” (12) と発言し、件の婦人が放蕩を繰り返す女性であり、そのような女性の戯れの為に自分の身体は手放せないと彼の要求を拒否する。このような発言から彼女が高い倫理観を持つ女性であること、そして男性に無闇に欲望の対象として見られることを嫌う彼女の性格が窺える。彼女はそのような上流階級の夫人とは基本的に対極にある女性として描かれるが、彼女にはそのような意識と行動とは裏腹に矛盾した側面もある。彼女は作品中では一貫して Giles Winterborne という男性を一途に思い続ける。彼女がここで要求を拒否して、自分の髪の毛の維持を望んだのはこの男性の存在故であり、彼女はこの男性を惹きつけるためにその姿に拘る。皮肉な構造であるが、彼女自身もまた男性の目を意識し、自分の身体を維持しようとしているのである。このように彼女は男性の欲望の対象となること

に嫌悪を抱きながらも、自分は Giles の目を意識するのである。

それを示すように Percomb は、“*you’ve got a lover yourself, and that’s why you won’t let it go!*” (12) と強く発言し、彼女が髪を手放さないのは他ならぬ自分の想い人のためであることを見抜き、彼女の矛盾を露呈させる。(この Percomb の発言は彼女の髪の毛の維持もまた男性の為であり、彼女もまたこの髪によって男性の視線を集めるという意味では、Mrs. Charmond と変わらないということを示している。これは彼女が無意識に男性の欲望として認識されることを志向していることを指摘する皮肉な言葉である。)

この会話の後、彼女は彼が Grace という女性と婚約することになっていることを Grace の父母の Melbury 夫妻の会話から知る。自分が Giles と決して結ばれることがないということを知った彼女は髪を切り落としてしまう。その断髪の前前の夫妻の会話を聞く場面で Marty の姿には彼女の身体に特異な影が差し込み、彼女のこの運命を暗示する描写となっている。

The cart-house adjoined the garden, and before Marty had moved she saw enter the latter from the timber-merchant’s back door an elderly woman sheltering a candle with her hand, the light from which cast a moving thorn-pattern of shade on Marty’s face. (16)

以上の引用は彼女が夫妻の姿を目撃する場面である。夫の Mr. Melbury が庭先に立ち、その傍らに妻がキャンドルの灯を持ちながら立っている。その光が彼女の顔に射し、その際に“thorn-pattern”の影が彼女の顔に射し込む。この茨のイメージの特異な影は彼女が自分と想い人の Giles が決して結ばれることができないという彼女の苦難と苦痛、そしてこの後の彼女の断髪をこの影の描写は暗示する。

この彼女の断髪行為は彼女の内面的な資質、特に性的な観念との関わりを強く示していると言われる。この点に関しては数多くの研究で指摘されるところでもある。例えば、Ian Gregor はこの場面に注目し、彼女とその想い人

である Giles に共通する内的な資質を指摘しながら、この点に言及している。彼は Giles と Marty は共にこの Hintock の自然に根ざして生きる人間であり、この地の自然を知り尽くす者であることを指摘する。作中では彼の指摘するように、Marty は “Marty South alone, of all the women in Hintock and the world, had approximated to Winterborne’s level of intelligent intercourse with Nature” (399) と語られる。彼はこのような彼女の性質に注目しながら、 “that ‘intercourse’ with Nature, however, is not be equated with the intelligent intercourse of man with man, or man with woman [...]”¹¹ [sic] と述べる。つまり、彼女の持つこのような自然との交感能力は飽くまでも人と自然との間でのみ有効なものであり、それは決して男と女、それを含んだ人間相互の関係に繋がるものではないのである。つまり、Marty は男女の性的なものを含む人間関係、それを円滑に構築する能力を欠いたもしくは放棄した存在と考えられるのである。これを踏まえてさらに考えると、先の彼女の断髪行為はこのような欠如や放棄を決定的に示した描写であるといえる。それを示すように彼女の断髪は性のイメージを含んだ言葉によって語られるのである。

She would not turn again to the little looking-glass out of humanity to herself, knowing what a deflowered visage would look back at her, and almost break her heart; she dreaded it as much as did her own ancestral goddess the reflection in the pool after the rape of her locks by Loke the Malicious.
(20)

以上は彼女が髪を切った際の彼女の描写である。この様子はここでは北欧神話のイメージによって語られ、彼女の姿は悪心 Loki に髪を悪戯で切られてしまう女神 Sif の類似が示される。¹² このようにして彼女の喪失感が強調されるが、ここで最も注目すべきは、その断髪の様子は “the rape” と語られる点である。このことから、この Marty の断髪やそれを迫る Percomb とのやり取りはやはり彼女の性意識や能力に深く関係していると思われる。

Gregor もまたこれに関してやはり言及している。

Her most memorable gestures are her refusal of the barber's offer to cut off her hair [...]. The fierce assertion of her sexuality in Marty's refusal, "My hair's my own and I'm going to keep it," is followed by the ruthless self-mutilation, her plundering of her selfhood [...]. The hair lies "savagely still" "upon the pale scrubbed deal of the coffin-stool table... stretched like waving and ropy weeds." The gesture for Marty is to be a final one, so that after Giles's death, she looked "almost like a being who had rejected with indifference the attribute of sex." (80)

彼女の自身の髪の毛を差し出すことの頑なな拒否とそれに続く断髪は、彼女が異性から性対象として認知されること、即ち彼女の女性性の放棄、喪失を示す行為であることを Gregor は指摘する。さらに加えて、彼女自身の手による断髪は、彼女は切り落とした美しい髪の毛を柩のような椅子 "the coffin-stool table" (20) に打ち捨てるため、この行為は彼女の性の放棄を決定的に示していることが述べられる。

確かに、既に見たように、髪の毛は彼女の最も美しく人目を引き、男性の目を惹き付ける部位である。それをこのように剥ぎ取り、打ち捨てる行為は一種の去勢行為の暗示であり、そのように見る男性の視線の拒否であり、放棄といえるだろう。この点は、先に触れた彼女の髪がそこに当てられる光と共にそこに視線を向ける男性の欲望を示していたことを考えると明白と思われる。彼女の美しい髪の毛に対する Percomb の欲望を、彼女を照らす光は示していた訳だが、その光が集中する髪を男性の欲望の対象として求められることの拒否、そして自身の手による廃棄はやはり疑いなく男性の欲望の対象となること、性対象となることの拒否であり、自分の性の放棄を暗示したものであると言える。また、さらに先の Richardson の分析も考慮に入れると、これは同時に自分が金銭と交換可能な商品となることの拒否でもある。

彼女は Percomb が執拗に視線を向けたこの髪を切り落とし、無造作に投げ出すことでそのように見られることへの嫌悪と忌避を示している。彼女はこのような行動に出ることによってその価値体系からの脱却を試みようとしているのである。(しかし、結果として彼女は髪を商品として差し出してしまふ。彼女の髪はその後も Mrs. Charmond の鬢、この婦人の体の一部として、男性の視線、欲望を集め、そのような対象として扱われ続けるのである。このように彼女自身は忌避してはいるがその意思に反して否応なくこのような価値観や視線に巻き込まれてしまっているのである。)

この彼女の異性に見られ、性対象などの欲望の対象となることの忌避と光との関係は作品の3章の末尾で最も決定的な形で描かれる。彼女の上記のような意思にも関わらず、仕事の最中に彼女は Giles と鉢合わせてしまうのである。その際に彼に不運にも自分の変わり果てた髪に気付かれてしまう。これに Marty は深く傷つき、その場を立ち去るのだが、その際の様子は以下のように描かれる。

But she ran off into the gloom of sluggish dawn. He [Giles] did not attempt to follow her. When she reached her father's door she stood on the step and looked back. Mr. Melbury's men had arrived, and were loading up the spars; and their lanterns appeared from the distance at which she stood to have wan circles round them, like eyes weary with watching. (23)

彼女はその場を逃げるように夜明けが近づく中、立ち去り、自分の家路に着く。そうして、ふと振り返ると、そこに材木屋 Melbury の関係者の男達が仕事の為に集まってくる様子を彼女は確認するのであるが、彼らの持つランタンの灯火の光が円状を成し、それがまるで Marty には彼女を見つめる眼のように映る。ここでは光は彼女を見つめる周囲の視線、特に Giles を含む男性の視線を彼女が強く意識していることを示している。そして、それに加えてこのような男性の視線、欲望の対象となることを忌避し、そこから脱却

するために衝動的に断髪したことで同時に想い人の Giles も失うことになった彼女の悲哀も強調している。

これ以後、彼女は想い人の Giles をはじめとして、他の男性との関わりを強く持たずにやや後ろへと引いた形の位置を保ち続けるのである。彼女は上記で見たように男性の視線や欲望、そして彼女の身体や姿が商品のように認識されることから一貫して逃れようとするのである。そして、次の最後の Marty の登場場面ではそれが非常に印象的な形で示されている。

As this solitary and silent girl [Marty] stood there in the moonlight, a straight slim figure, clothed in a plaitless gown, the contours of womanhood so undeveloped as to be scarcely perceptible in her, the marks of poverty and toil effaced by the misty hour, she touched sublimity at points, and looked almost like a being who had rejected with indifference the attribute of sex for the loftier quality of abstract humanism. (443)

Marty はこの物語の最後で只一人で Grace の為に亡くなった Giles の墓の前で佇む。彼女が佇むのは霧深い夜であり、彼女はその中に姿を隠され孤立したように立ち続けるのである。そのような姿の隠蔽と孤立の描写は上記のような彼女の他者の視線や欲望からの逃避、脱却を暗示しているように思われる。上記にある“the contours of womanhood so undeveloped as to be scarcely perceptible”と表される彼女の姿はそれを良く示している。Marty はこの最後の場面においても自らの男性を惹き付けるようないわゆる女性的な魅力を放棄しており、そのように見られることをやはり忌避していることがこの濃霧の夜で隠される彼女の姿によって表象されている。このように彼女は一貫して性や欲望を伴う視線を忌避するのであり、それを表象する光からは無意識的に逃れ、その身を淡い月光と薄闇と濃霧の夜に隠すのである。

(3) Grace と明暗—受動性

以上で見たように Marty の周辺を取り巻く明暗は彼女を見つめる周囲の他者、特に男性の目線、その欲望を表象しているのであるが、彼女と同様に明暗の描写と強く関係している人物が存在する。それこそがこの作品のもう一人のヒロインである Grace Melbury である。彼女もやはり印象的な光と闇の描写がその身の周辺の周辺に類出する。しかし、それは Marty の場合とは異なった類のものである。

彼女のその出自と置かれた環境はかなり Marty とは異なる。彼女が Hintock に長く住む土地に強く根ざした住人であるのに対して、Grace は生まれこそこの Hintock であるが、父親の希望により都市部で両親と離れて暮らし、近代的な教育を受けた人間である。それ故に彼女はここに住みながら、この土地とはややかけ離れた洗練された習慣と教養を身につけた人物として描かれる。言わば、半分はこの土地の者でありながら、半分は都会育ちであり、この Hintock からすれば余所者なのである。彼女が最初に登場するのは彼女が都市部の学校から故郷に帰ってくる場面である。ここで描かれる彼女の姿はその内に秘める性質を良く表している。

In simple corporeal presentiment she was fair and clear complexion, rather pale than pink, slim in build and elastic in movement. Her look expressed a tendency to wait for others' thoughts before uttering her own: possibly also to wait for others' deeds before her own doing. (42)

彼女の姿、物腰からは自分の思いを示す前に他人のそれを予め待つてしまうというような受動的な側面が強く出ているところでは語られる。この点は Marty とは異なる。上記で見たが、Marty はその顔、姿に彼女が今まで歩んできた人生や人格が如実に現れている。しかし、Grace は彼女とは大きく異なり、そのようなものが不透明であり、只、彼女の受動的な側面が特に強調

される。この受動的な彼女の様子はさらに以下のように語られる。

There was nothing remarkable in her dress just now beyond a natural fitness, and a style that was recent for the streets of Sherton. But, had it been quite striking, it would have meant just as little. For there can be hardly anything less connected with a woman's personality than drapery which she has neither designed, manufactured, cut, sewed, nor even seen, except by a glance of approval when told that such and such a shape and colour must be had because it has been decided by others as imperative at that particular time. (42)

彼女の服装は当世風の流行のものであり、そこから彼女の人格を直接的に読み取れるものは希薄であることがここで示される。そこに在るのはやはり、流行をただ、単純に享受するのみで、殆ど彼女自身の人格を取って開示させない彼女の受動的な姿のみである。この彼女の姿は以下のようにも表される。

The woman herself was conjectural creature who had little to do with the outlines presented to Sherton eyes: a shape in the gloom, whose true quality could only be approximated by putting together a movement now and a glance then, in that patient attention which nothing but watchful loving-kindness ever trouble to give. (42-43)

彼女の真の姿、性格、内面などは外面的な特徴からは、一切掴み取ることができない。可能なことは只、類推することのみである。ここではそれ故に、彼女は“conjectural creature”“a shape in the gloom”と描写される。彼女は確固とした実体を持つものというよりむしろ、おぼろげで、不透明な存在として紹介されるのである。ここでは彼女の様子は“gloom”という闇を示す言葉によって表されるが、これは彼女の外面からの捉えがたさを示すのであ

る。

このような彼女を見る人々の視線にはしばしば類推“conjecture”という行為が付随する。彼女の周囲の人物、特に男性はそれぞれ主観的な類推を廻らせながら、彼女をという女性を判断し、捉えようとする。例えば、Grace が Giles に連れられて、彼女の実家に帰郷した時、彼女の父 Mr. Melbury が彼女の姿を見るときは次のように表される。

The family had gone into the parlour, and were still absorbed in themselves. The fire was as before the only light, and it irradiated Grace's face and hands so as to make them look wondrously smooth and fair beside those of the two elders; shining also through the loose hair about her temples as sunlight through a brake. Her father was surveying her in a dazed conjecture, so much had she developed and progressed in manner and stature since he last had set eyes on her. (50-51)

Grace は無事に帰郷し、彼女の両親によって実家へと迎え入れられる。その際、家の灯が彼女の姿、顔や手、髪などを照らし、美しさを際立たせる。彼女の父はそのような彼女の姿を半ば見惚れながら、一瞥する。その様子は“a dazed conjecture”と語られ、彼はその姿に様々な思いを巡らせていることが暗示されるのである。(ここでは Mr. Melbury が娘の美しく照らされた外見から、都会での生活やそれを通しての成長に思いを寄せていると思われる。) ここで彼女を照らす家の光は彼女の洗練された美しさを強調すると同時に、彼女を見る父の視線とそれに付随する様々な思いを想起させるものとなっている。この光は何とかがして、彼女の本質、内容を把握しようとする彼女に視線を向ける父親の欲望、願望の表象でもある。このような類推を廻らせて、女性の風貌から何かを掴み、自らのものとしようとする執拗な視線はどこか前述した Percomb と通じるものがあると思われる。ここでは父親は照らされた彼女の風貌から想いを廻らせ、彼女の洗練された性質を読み取る

うとする。彼女の父親である Melbury は強い階級意識を持つ人物であり、上流家庭や階級を崇拜し、憧憬を持つ人物である。彼はここで“a shape in the gloom”とされるこの女性の捉え難い本質を光で照らして、その中にあるものを明るみに出そうとするのである。換言すれば、彼はここで自分の願望に基づいて彼女を捉え、そうして娘の風貌から洗練された文化の一面を読み取ることによって、自分の娘が洗練された女性になったことを認識し、自らの社会的な上昇願望を満足させようとするのである。このように、彼女にここで差し込む光と彼の視線はこのような彼の願望と欲望を反映した描写であると言える。このような男性の視線に対して Grace は Percomb と Marty の場合とは対照的である。彼女は Marty とは逆にこのような視線を拒否しない。むしろ、このような彼の願望に同調しようとするのである。

また、彼女の父は娘を含めた女性の在り方に関して、次のように述べ、女性の在るべき姿が男性に対して受動的なものであることを表明する。“I tell you it is that! I’ve noticed, and I’ve noticed it many times, that a woman takes her colour from the man she’s walking with.”(101) と Melbury は述べる。彼は娘を含めた女性はその性質、価値を隣接して歩く男性の質によって決定されると考えるのである。これは換言すれば、女性は他者、男性からの目線や欲望によってのみ、その人物像や立ち位置を一方的に規定されるということである。彼はこのように女性を非常に受動的な存在として考え、それは彼の娘の在り方にも反映している。Grace はまさにこのような存在であり、父親も含めた男性の視線やそれに伴う願望や欲望に対してやはり受動的であり、彼らの望むように従うのである。

そのような性格の彼女は父との再会の場面にあったような光によって表象される他者の視線を強く意識する。この視線を意識した時の彼女の心理も光によって暗示される。以下の例は彼女が対外的な視線を強く意識した時の描写である。

Grace, surrounded by a sufficient number of candles to answer all purpose

of self-criticism, was standing before a cheval glass that her father had lately bought expressly for her use; she was bonneted, cloaked, and gloved, and glanced over her shoulder into the mirror, estimating her aspect. Her face was lit with the natural elation of a young girl hoping to inaugurate on the morrow an intimate acquaintance with a new, interesting, and influential friend. (64)

Grace は Hintock にしばしば訪れる上流階級の寡婦, Mrs. Charmond の目に留まり, 父の後押しもあって, この女性の屋敷に招かれることになる。上の引用はその屋敷を訪問する前日の夜の彼女の姿である。彼女は翌日の訪問の為に着ていく自分の服装を鏡の前に立って見る。その際に彼女の周囲には蠟燭の灯が6本灯され, 彼女の姿を照らし出す。この光の下で彼女は自分の姿を, 鏡を通して見つめ, 翌日に控えた高貴な女性との対面に思いを巡らせる。ここで彼女が意識するものは, 翌日対面するまだ見ぬ Mrs. Charmond の視線である。彼女は上流階級に溶け込む為に, そこに合わせるように自分の衣服や姿に注意を払っているのである。ここで彼女を照らす蠟燭の灯は彼女の上流階級に対する憧憬を勿論表しているが, 同時にその裏に彼女は父親 Melbury の上流階級に対する野心と願望も暗示する。彼女は父親の彼女が上流の女性であって欲しいという意向に同調し, そのような女性であろうとする。そのような父から伝えられた理想を基に彼女はここで自分の姿を見ているのである。

このように彼女は既存の社会に受動的に順応しようとする。ここで彼女を照らす光は上流社会の中の既存の制度の中で自分が認められることを望む意思を示す表象であり, 同時にこのような彼女の心理の裏には彼女の父の意思があり, 彼女はこの支配を被っているのである。そのような彼女の性格はさらに光を用いた比喻によって強調される。

But Grace, though she looked up and saw him, was just at that time too

full of the words of her father to give him any encouragement. The years-long regard that she had had for him was not kindled by her return into a flame of sufficient brilliancy to make her rebellious. (110)

彼女は帰郷した後、父親の意思によって幼馴染の Giles と交流することを禁じられる。彼女の父は娘が教養のない下層階級に属する彼との結婚によって娘が社会的に下層に置かれてしまうことを恐れたのである。そんな彼女が偶然、Marty の父、Mr. South の家の樹上で作業をしているところを通りかかり、声を掛けられた際の描写が上の引用である。この時、彼女は内心、彼の存在が気に掛かりつつも父の言葉に逆らうことができない。そのような内面の様子、葛藤は引用文中の“a flame of sufficient brilliancy”という炎の光のイメージによって語られるのである。この炎のイメージが示すのは反抗心であるが、これは決して彼女の中で燃え上がることがない。ここではこのような光の欠如が語られているのである。このような光のイメージの欠如は彼女の自立性、主体性の欠如を暗示する。(そして、このことを踏まえ、前述した“gloom”と語られる彼女の様子を振り返って考えてみると、最初の薄闇のイメージはこの彼女の自立性と主体性の弱さを表象していたものとも言えるであろう。)彼女は周囲の男性から光を当てられることはあっても、自らの意思でこのような光のイメージを発することは決してない。彼女を取り巻く光はあったとしても、全て周囲の男性の意思を反映したものなのである。そして、Fitzpiers との結婚後もそのような受動性は変わることなく継続する。

Personally she liked the home of her childhood much, and she was not ambitious. But her husband had seemed so dissatisfied with the circumstances hereabout since their marriage that she had sincerely hoped to go for his sake. (236)

彼女の夫となった Fitzpiers は彼女の故郷の Hintock で過ごすよりも都市部へと移住することを望み、それに向けて行動する。彼女は自分の故郷の環境や文化に対して愛着はあるが、それよりも夫の意向に従って生きようとするのである。

このように彼女は夫の Fitzpiers の意思に従う。そして、彼女自身もまた父親の Melbury の場合と同様にこの男性の望む女性像に無意識的に近付こうとする。彼の望む女性とは如何なるものであるのか。それは彼の次のような発言に表れている。

“Human love is a subjective thing—the essence itself of man, as that great thinker Spinoza says—*ipsa hominis essentia*—it is joy accompanied by an idea which we project against any suitable object in the line of our vision, just as the rainbow iris is projected against the oak, ash, or elm tree indifferently.” (138)

彼は自らの女性に対する愛情とその志向を上のように述べる。彼はここで人間の（男性の女性に対する）愛情というものは本質的に備わったものではあるが、それは樹木に掛けられた虹とその光のように儂いものであり、また実体を伴わない幻影のようなものであることを語る。Fitzpiers がこのような光の儂いイメージと共にこの発言で明言するのは、彼の女性観が非常に観念的なものであり、実際の女性の実態からかけ離れたものであるということである。現に彼は実際に彼女を捉えることはなく、時々見かける彼女から類推を廻らして、彼は内面で Grace を観念的に捉えるのである。それを示すように Fitzpiers のこのような嗜好は “The young lady remained in his thoughts. He might have followed her, but he was not constitutionally active, and preferred a conjectural pursuit.” (135) と語られる。（尚、注目すべきことに、ここでも “conjectural pursuit” とあるように、彼も Melbury 同様に主観的な類推を以って彼女を捉えようとするのである。）このような女性に対する過度の実体

とかけ離れた観念化は Hardy の作品の男性に共通して頻出する特色でもある。この作品の他にも *The Return of the Native* の Clym や *Tess of D'urbervilles* の Angel などがやはり同様に女性たちを観念的に捉え、理想化している。この点に関して Anne Alexander は当時の社会の中に見られる女性観の反映の一つであることを指摘している。

Hardy is, in effect, inviting us to consider how far society misuses an instinctive tendency to idealize the Beloved. Instead of simply recognizing its place in the course of a romantic relationship, Hardy's society expects real women to correspond with the ideal to an unreasonable extent.¹³

Alexander は当時の社会において、男性が女性を過度に理想化、観念化する傾向が強化される風潮があったことを指摘する。それはこのような Hardy の作品にも反映し、女性は一方的に観念的なイメージに一致することを望まれていると彼女は述べる。Fitzpiers もこの例外ではなく、彼もまた Grace を理想化し、観念的な形で彼女を捉えようとする。

そして、最も注目すべきは彼がやはりこのような観念的な女性像を光のイメージによって捉えているということである。それを示すように Fitzpiers は Grace のことを “This phenomenal girl will be the light of my life while I am at Hintock [...]” (157) と語る。彼にとって彼女との出会いはまさに暗雲の中に輝く光のように感じられるのである。(尚、先に示した引用箇所でも彼は “rainbow iris” という比喩を用いている。) このように、彼は主観的な思考によって彼女を捉え、彼女のイメージは光の比喩によって示される。

Grace は Fitzpiers のような男性が抱く女性のイメージに近付こうとする。即ち、彼が上記で描いたような光のイメージである。ここで再び先に触れた鏡の前で光に照らされる彼女の姿が重要な意味を帯びてくる。鏡の前で光に照らされる Grace の様子はこの点を踏まえると、このような男性の欲望ともやはり決して無関係ではない。この場面の光輝く Grace のイメージは彼

の抱く光のイメージと近似するものである。このことから思われることは、Mrs. Charmond に近付こうとした時点で無意識的に彼女は男性の思う理想に近付こうとしているということである。先に示したように Grace の姿を照らした光は主に彼女が憧憬をよせる Mrs. Charmond を意識したものであるが、この婦人もまた根本的には男性を惹き付けるためにその身を飾る女性である。故に彼女の生活する環境や制度、状況に順応する為に同じように着飾ろうとすることは、同様な階級に属する Fitzpiers のような男性の願望、その需要に答えるものであるといえる。また勿論、父親の望む上流階級参入への願望にも答えたものであるといえよう。

このように Grace の姿を照らす光は他者の目や願望を意識し、これらに支配される彼女の心理を表象するのである。またさらに Grace の眼前に現れる光やその輝きは上流の男性の知識や社会的な優越性を示す象徴として彼女の前に迫り、これを彼女に自覚させる。例えば Fitzpiers もまた、やはり光によってその存在感を彼女に示すのである。以下は、結婚前に初めて Grace が彼の存在を知る際の描写である。

The blind had been drawn up as she used to have it when a girl, and she could just discern the dim tree-tops against the sky on the neighbouring hill. Beneath this meeting-line of light and shade nothing was visible save one solitary point of light, which blinked as the tree-twigs waved to and fro before its beams.

From its position it seemed to radiate from the window of a house on the hill-side. The house had been empty when she was last at home, and she wondered who inhabited the place now.

Her conjectures, however, were not intently carried on, and she was watching the light quite idly when it gradually changed colour, and at length shone blue as sapphire. Thus it remained several minutes, and then it passed through violet to red. (53)

Grace は帰郷したその日の夜に自室の窓から不思議な光を目にする。それはかつて空き家であった所から発せられた光であり、彼女はそこに誰か住んでいるのかを不思議に思う。その家こそが彼女不在の間に村にやって来た医師の Fitzpiers の家である。ここで、彼の存在は万華鏡のような不思議に変化を続ける光 “Kaleidoscopic dream” (57) によって、Grace の目に入り、彼女の興味を掻き立てるのである。この不思議な光は彼の科学研究によって発生したものであり、彼の職業的な立場とそれに伴う知識を示すものでもある。このような光を通じて Grace は彼の人物像に興味を持ち、如何なる人物かを推測する。

The latter's [Grace's] eyes rested on the distant glimmer, around which she allowed her reasoning fancy to play in vague eddies that shaped the doing of the philosopher behind that light on the lines of intelligence just received. [...]

Thus she remained thinking, the imagined pursuits of the man behind the light intermingling with conjectural sketches of his personality; till her eyes fell together with their own heaviness, and she slept. (56)

ここで彼女がこの光を通して思い描くのは、やはり知的な面で彼女を凌駕する存在である。彼女はそんな存在に憧れと畏敬の念を以って思いを巡らせるのである。この時に彼女は彼に対して Mrs.Charmond 同様に強い憧れの意識を持っていたのは想像に難くない。そして、そのような憧憬の念を以って彼女は彼と結婚するが、結婚後もこのような彼の超越性、優越性を示す光は依然として彼女の眼前に表れる。この作品の終盤で彼女は Fitzpiers の不貞行為が原因で身を寄せた Giles の下で彼から熱病を感染させられてしまう。彼女はこの病で生命の危機に晒されるが、あわやのところで、夫は必要な薬を彼女の前に差し出す。その薬は “The liquid was of an opaline hue, and bore a label with an inscription in Italian.” (397) と語られ、オパールのような光沢

と色彩で彼女の眼前に迫る。これは先の彼の部屋からの神秘的な光と同じように彼の医師としての知識や技術の優越性を彼女に示すのである。現にこの薬によって彼女の容態は回復し、このことを彼女自身、実感する。その結果、彼女はこの夫の下に最終的に戻っていくのである。このように Grace の眼前に現れる光は彼女の上流階級やそれに属する男性への憧憬を掻き立て、同時にそれらの優越性を彼女に指し示す。Grace はこの光を通して、これらの自分に対する優越性を認識し、そこに自分を従属させるのである。

ここまで見たように、Grace の周辺の光（そしてそれに付随する闇）は彼女の周囲の男性の視線と欲望を表象する。彼女自身もそのような周囲の視線と願望を意識し、Marty とは対照的に彼らの意思や欲望に従属するのである。そして、このような周囲の意思と願望に基づいて、上流階級への憧憬を抱き、その社会で望まれる女性像を無意識に志向する。このような彼女の受動性、上流社会や男性の彼女に対する優越性の認識そして主体性の弱さを彼女の周辺の明暗の描写は象徴的に示すのである。

(4) おわりに一抑圧される女性、真の生の追及

本作ではこの二人の女性が周囲の男性から、金銭や性、観念的な愛情等、一方的に彼らの欲望をその身に投げかけられる。女性たちはその姿や人格を他者、男性による一方的な視線によって規定されるのである。彼女らはそれらに対して、対照的な反応を示す。Marty South はそのような欲望を忌避し、そのような価値体系から脱することを志向し、苦悩する。そして、もう一方の Grace Melbury は彼らの欲望に順応し、これに従う。この対照的な二人の女性の周囲の視線や意識に対する反応がこの作品では彼女らを取り巻く光と闇の描写によって象徴的に表されているのである。

このような対照的な女性像と明暗の描写によって Hardy は、人間同士の相互の関係の中に現れる欲望や願望を表し、この周囲の視線や欲望によって抑圧され、あるがまま生きることが困難な女性たちの姿を強く示したのではないだろうか。それを示すように、どちらの女性も決してこの行動の結果、

幸福な婚姻関係や生活に行き着くことはなく、その苦悩と葛藤が一貫して描かれる。Hardy はこのような女性を通して、当時の社会的な抑圧及び不条理な制度をその作品において描き、その不当性を明るみに出そうとした作家であった。¹⁴ 本作でもこのような二人の女性像と彼女らを取り囲む男性の欲望や情念を明暗の描写で象徴的に描くことによって、彼は真に自由に生きること、生をあるがままに謳歌するということが如何に当時としては困難であったかを示し、男性の女性に対する一方的な欲望やそれに基づいた価値体系が支配する社会の欠陥を明るみにだそうとしたのではないだろうか。この主題は彼の生涯を通じてのものであったように思われる。このような抑圧の中で苦悩する女性の姿は後年の代表作である *Tess of the D'Urbervilles* のヒロインである Tess の姿に通じる。この作品で Hardy はその存在を特に強く当時の世に知らしめることになるが、この作品はその萌芽の一つとなっているのではないだろうか。

注

1. Hardy の作品においてこれまでも明暗に関しては幾つかその効果、比喩的な意味などが研究されてきた。例えば、Michael Irwin はその一人であり、彼もこのような彼の作品内に登場する描写に着目している。彼は特に光に着目し、“Light is a major theme of this kind, traceable in all the novels and very many of the poems. Originally the propensity was no doubt instinctive” と述べ、このような描写が Hardy の作品においては類出するものであり、彼の作品に登場する詳細な人物や自然の描写の中でも特筆すべきものであり、彼の作風の特色の一つであることを指摘している。(Irwing “Seen in a New Light: Illumination and Irradiation in Hardy.” 1)
2. Frank R Giordano Jr, “*T'd Have My Life Unbe*”: *Thomas Hardy's Self-Destructive Characters*, (Alabama: U of Alabama P, 1984) 137.
3. Thomas Hardy, *The Life and Work of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1984) 183 本稿での彼の日記、手記の引用はこの版によるものである。
4. Thomas Hardy, *The Woodlanders*. (New York: AMS Press, 1984) 本稿での作品の引用は全てこの版によるものである。

5. Michael Irwin, "Seen in a New Light: Illumination and Irradiation in Hardy." *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed. Philip Mallett. (London: Macmillan, 2002) 2.
6. Thomas Hardy, *The Return of the Native*. (New York: Norton, 1969) 109.
7. 印象派絵画の革新的な技術的特色に関して、モーリス・セリュラス (Mauris Sérullaz) は『印象派』の中で「画家たちは、どんな形態でも、自分が知識として知っているような形には表さなくなり、感覚的に、ものの形をゆがめる光の働きのもとに自分の眼に映ずるままに、ものの形を表そうとする」(セリュラス 9)と述べる。このような技巧に Hardy は着目していたのである。実際に Hardy は1886年12月7日にこのような流れを組む絵画に触れて感銘を受け日記にも次のように記している。

"At the Society of British Artists there is good technique in abundance; [...] The impressionist school is strong. It is even more suggestive in the direction of literature than in that of art." (191)
8. J. B. Bullen, *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. Oxford: (Oxford UP, 1986) 182.
9. Michael Millgate は Hardy の伝記の中でこの *The Woodlanders* の出版に彼が成功を取めた後に当時のロイヤルアカデミーの院長であり、画家であり、彫刻家でもある Sir Frederick Leighton に *The Woodlanders* の初版本を送っていることを指摘し、彼が彫刻や絵画にこの時只ならぬ関心を抱いていたと述べる。このことから Hardy がかなり当時の絵画などを意識して、このような視覚的な描写を作品に持ち込んだことは想像に難くないといえる。Millgate は "Hardy's gesture in sending his book to Sir Frederick Leighton is indicative of his continuing interest in painting and sculpture at this period" (Millgate 263) と述べこれを指摘する。また、Lloyd Fernando も彼の小説での絵画や画家に関する言及が30以上に上っていることを指摘し、彼が視覚芸術にやはり強い関心と共感をもってこれを作品に取り入れていたことを指摘しており、このような芸術が如何に彼の影響を持っていたかは明白である。(Fernando 62-63)
10. Angeliqe Richardson, "Hardy and Biology" *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. (London: Macmillan, 2002) 169.
11. Ian Gregor, "The Great Web: The Woodlanders," *Thomas Hardy*. Ed. Harold Bloom. (New York: Chelsea House, 1987) 80.
12. K・クロスリー-ホランド 山室静・米原まり子訳『北欧神話』青土社 1983年

索引 vi

13. Anne Alexander, *Thomas Hardy: The 'Dream-Country' of his fiction*, (London: Vision Press, 1987,) 108.
14. Hardy の作品においては、本作に限らず女性の登場人物の多くは社会的な抑圧とその不条理に苦しむ。Rosemarie Morgan はこれに関して “they struggle to shape their own lives with a vigour and energy resilience that is, to the reader, the more remarkable for the fact that theirs is a struggle against all odds, a struggle in a world that, [...] is not friendly to women” (Morgan x.) と述べ、女性たちはそのような世界や社会の中で必死に生きる道を模索し、苦悩している様子が描かれていることを指摘する。

参 考 文 献

- Alexander, Anne. *Thomas Hardy: The 'Dream-Country' of his fiction*. London: Vision Press, 1987.
- Bloom, Harold. ed. *Thomas Hardy*. New York: Chelsea House, 1987.
- Bullen, J. B. *The Expressive Eye: Fiction and Perception in the Work of Thomas Hardy*. Oxford: Oxford UP, 1986.
- Fernando, Lloyd. ‘Thomas Hardy’s Rhetoric of Painting’, *Review of English Literature*, 6 October, 1965. 62-73.
- Girodano, Frank R, Jr. *“I’d Have My Life Unbe”*: *Thomas Hardy’s Self-Destructive Characters*, Alabama: U of Alabama P, 1984.
- Gregor, Ian “The Great Web: The Woodlanders,” *Thomas Hardy*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. 73-95.
- Hardy, Florence, Emily. *The Life of Thomas Hardy 1840-1928*, New York: St Martin’s P, 1962.
- Hardy, Thomas. *The Life and Work of Thomas Hardy*, London: Macmillan, 1984.
- . *The Return of the Native*. New York: Norton, 1969.
- . *The Woodlanders*. New York: AMS Press, 1984.
- Irwin, Michael. “Seen in a New Light: Illumination and Irradiation in Hardy,” *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. London: Macmillan, 2002. 1-17.
- . *Reading Hardy’s Landscapes*, Basingstoke: Macmillan, 2000.
- Mallett, Philip. ed. *Thomas Hardy: Text and Contexts*, London: Macmillan, 2002.
- Morgan, Rosemarie. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*, London:

Routledge, 1988.

Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*, Oxford: Oxford UP, 1982.

Richardson, Angelique. "Hardy and Biology," *Thomas Hardy: Text and Contexts*. Ed Philip Mallett. London: Macmillan, 2002. 156-179.

K・クロスリイ-ホランド 山室静・米原まり子訳『北欧神話』青土社 1983年
モーリス・セリュラス 平岡昇・丸山尚一訳 『印象派』白水社 1992年

The Woodlanders: Light and Darkness, Desire, Eye

TANIYAMA, Tomohiko

The Woodlanders was published in 1887. The novel is one of Thomas Hardy's famous works along with *Tess of the D'urbervilles* and *Jude the Obscure*. The main theme of the novel concerns the tragedy of men and women in rural Wessex. All Hardy's novels contain many detailed expressions; not only detailed representations of men and women but also detailed descriptions of those characters in their natural setting; especially, the first appearance of characters is closely linked with the description of nature where characters metaphorically disclose their hidden emotions within the natural scene.

Among the descriptions of nature in the novel, the most impressive is *chiaroscuro*, the contrast between light and dark, particularly, noteworthy. In all his works, the light and dark reflects the emotion of his characters. For instance, whenever the characters are depressed, the darkness is inserted around the characters. Conversely, whenever the characters are in high spirits, a light imagery is used. This contrast is one of important keys for understanding his novels.

One of the conspicuous examples in *The Woodlanders* is the expression of the psychological contrast between two women: Marty South and Grace Melbury. This paper chiefly considers the interrelation of the *chiaroscuro* of the two women. Through the light and the dark, their consciousness and unconsciousness against men are represented.

For Marty South, the light means man's desire for her body. This is well represented when the merchant Percomb, who wants to buy her hair for a wig, looks at her in her cottage. The light emphasizes her physical beauty, especially her hair. But it also implies his focused gaze on her hair. The light shows his desire to get the beautiful hair for his own commercial purposes. However, she does not want to sell it, because she knew that the hair would be used for Mrs.

Charmond's wig to draw man's attention to her. Marty is disgusted to be an object of man's desire. (But the reason why she kept her hair is very paradoxical. In fact, Marty kept it for Giles Winterborne whom she loved, so subconsciously she wanted to be the object of man's desire albeit one man in particular. However, after she cut off her hair, the hair served to attract men's eye as a possible wig for Mrs. Charmond. Marty inevitably attracts men's desire.) However, through cutting her hair herself she undergoes a form of metaphorical castration, which reveals her attempt to get away from being a commercial or sex object. After this incident, Marty avoids to be thrown by the light, since, to her, all light is a metaphorical representation of men's eyes, not only Percomb's. As a result, she hides herself in the darkness. The darkness shuts her off from men; in the last scene, when she stands before the grave of Giles, her appearance is hidden in mist and darkness. The darkness here symbolizes her rejection of being an object of men's desire.

For Grace, the *chiaroscuro* is very different from Marty. She was born in Hintock, but following her father's will was educated in the urban culture. She is close to being an outsider as far as regional culture is concerned. In addition, her personality is very passive toward men (her father and husband). Therefore, her attitude toward light and dark is different from that of Marty. For instance, when she returns to her home, she meets her father Melbury in the light, which implies his joy to see his daughter as a refined lady. The light also represents his desire for her to be such a refined lady. Grace is also aware of his eye and desire. She does not reject the desire of men that the light represents: rather, she bends to it rather than rejecting. For example, she dresses herself to attract men surrounded by the illumination of candles. Her illuminated appearance also symbolizes a womanhood that men desire. Grace subconsciously tends to become the type of woman that men want. She is not disgusted to be the object of men's desire as Marty is. And for Grace, the light frequently appears as a representation of male superiority. For instance, in the night when she came back to her native countryside from the school, she sees at a mystic light, which is revealed from Fitzpiers's house. By this light Grace imagines his superior knowledge and power, which enhances her interest in him. As a result they eventually marry. And, when she has a fever, Fitzpiers helps her with medicine. The bottle of medicine reveals an image of light with opaline hue. The light has become a

symbolic phenomenon that represents superiority over her. Grace accepts his superiority and she adjusts herself to a world that is not friendly toward women. The light represents men's desire and her obedience.

Thus light and darkness represent two ways of woman's life in a men's world. Marty rejects men's desire. Conversely, Grace passively accepts their desire and vigilance. But neither succeeds to obtain a happy marriage. Marty cannot unite with Giles, because she feels that Giles should marry Grace according to the promise of Grace's father, and has spoiled her beauty by cutting her hair. Grace marries Fitzpiers following the will of her father. However, Fitzpiers is not capable of being the superior man that she expected. Consequently she also fails to achieve a happy marriage. The unfortunate marriage is one of the important themes in Hardy's works. Hardy seemed to portray freedoms even within an oppressive society. Through the impressive visual representation of woman's misfortune, he accuses contemporary society where men's one-sided oppression dominates women as defective and evil. Through the achievement of this novel, he appears to continue to investigate the problem till the achievement of *Tess of D'urbervilles* in which he represents fiercely oppressed women and the sexual tyranny of men.